

少しは反省しろ国土交通省！

坂田三允(群馬県立精神医療センター看護部長)

3月のある日曜日、職場の人と群馬をあちこちドライブした。その途中、名前は覚えていないのだが、小さなダムのそばを通りかかったとき、ダムに沈んだ村の人の話を教えてもらった。渇水期には、昔住んでいたころのままの家や学校や墓…あらゆるものが姿を現わして複雑な気持ちになるのだと。ちょうどその頃、本書の書評を読んだ。いくつかの書店で見つからず、注文をしたがなかなか連絡がこなくて、諦めかけていたときにやっと届いた1冊。

ダムの建設のために、湖底に沈んだ村や町は全国でどのくらいあるのだろう。たとえ多くの苦労はあったとしても、営々と営み続けてきたかけがえのない生活を捨てなければならなかった人々は一体何人いるのだろう。本書は、中国山地、岡山県の苦田ダムによって沈められたそんなひとつの町の物語である。

ダム建設の話がもちあがったのは1957年、今から45年も前のことである。目的の明確でないダムの建設に反対の声は強く、「民主主義国家で我々の願いが通じなことはありゃせん」と信じ、一丸となって県議会や建設省に陳情を繰り返していた町の人々。工事は始まらずもう大丈夫かと油断していた矢先、1972年、ダム建設の推進を表明する県知事に代わったことによって状況が一変する。「支払いが迫った年の瀬をねらって多額の札束を玄関に積む」作戦で、転居を承諾する家が出てくる。反対派の人々とは顔を合わせづらくなり、町の人々の間はしだいにぎくしゃくしていく。あげくに県は補助金支

出を停止するということさえ行なった。一般会計予算の20%を補助金に頼る町の財政は成り立たなくなって、町営医療センターや教員宿舎も作れず、道路もいたんだままという状態が続くことになるのだ。1990年、町はついに圧力に屈してダム建設を前提とする町政へと転換する。そして国は『「補償金の支払いを受けた住民が自宅から退去すると、建設省はすぐさま建物を壊すばかりか、ショベルカーで礎石をはぎ…」年ふり愛おしいもの、暮らしてきたひとびとの想い。かけがえのない人生の足跡。これらの抹殺にでたのである」

無くなってしまったのは建物だけではない。助け合って生きてきた人々のつながり、生活の知恵、伝統、文化。町を出て、散り散りになってしまった人には同じ思いを語り合う相手がいない。そして人々がなくなった山、森林は荒れ果てる。ダムは本当に必要なのか。必要なのだ。「ゼネコン救済のための工事」として。水力発電は環境に優しいと考える人は多い。私もそう思っていた。しかし「ダムによって消滅・荒廃する森林や緑地が、この論議からは抜け落ちている」と著者はいう。「ダムのもたらす利益は、その環境破壊度に比べれば、とるに足らない」と悟ったアメリカはダム廃止へと方向転換しているのだ。

長野県知事田中康夫氏は就任と同時に建設予定のダムの工事をすべて凍結した。その本当の評価は、私たちの孫やそのまた孫たちの世代にしなければできないのかもしれない。▲

さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ・・・。寢室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374

